はじめに

学校における言語教育

柳沢　今回このように広くいろいろな分野から言語、日本語あるいは国語教育に関わる人が集まるのは、そう多くない良い機会だと自負しております。今日は日本語教育の方々にもお集まりいただきました。これからのセッションは学校での日本語教育という話題を取り上げます。皆さんご存じない方もいらっしゃるかと思いますので、簡単に司会の方から補足情報として少しだけお話しさせていただきます。日本語教育を大学で行っている吉野さん、西川さんお二人の方には今日の進行、司会をお願いしております。その他に文部省が出しました『日本語をまなぼう』に関わりインドシナ難民の日本語教育などを担当されている社団法人国際日本語普及協会の岩見さん、関口さんにお出でいただいております。それから横浜国立大学で日本語教育を担当され教科教育と日本語教育の融合という視点から教科書というものを考えている工藤さん。新潟市で子女教育の中で言語習得をどう考えるかということに従事している足立さん。それから、帰国子女・外国人子弟と高校教育の中で関わっている都立国際高校の秋吉さん。発題者としては、インターナショナル・スクールで教えていらっしゃるスコギンズさんと、東京都立光丘高校で中国帰国者の子女がいるクラスで古典の授業を行なっている今泉さんです。

また、海外での子女教育の段階で日本語教育が行われています。逆に、国内では高等学校レベルで中国語教育などの第二外国語教育が盛んになってきています。このようなことを全部見ながら学校における言語あるいは言語教育というものを考えないといけない時期になってきたのだろうと思います。このような視点から初等・中等教育での言語教育の現状に詳しい国際文化フォーラムの中野さんにお出でいただいています。日本語教育は幅広いこと、高校や中学で外国語教育が広まってきた、という現状を踏まえて皆様方に学校での言語教育についてお話をしていただこうと思い、このセッションではいろいろな方にお集まりいただきました。それを上野さんと佐藤さんお二人にコメントをまじえながら、話し合いを行いたいと思います。

問題提起
帰国子女・外国人子弟等の言語教育

第二言語が日本語である学齢期の子どもたち

西川　このセッションでは帰国子女及び外国人子弟に対する言語教育という非常に広い枠をテーマとして用意いたしました。ただ、帰国子女・外国人子弟と一口に言いましてもその対象には広いものがあります。日本語が第一言語である子どもたちもおりますし、第二言語である場合もあります。また、多くの子どもはいわゆるバイリンガルの子どもだろうと思うのですが、その程度あるいは種類といったようなものも様々だろうと思います。

今回のセッションでは主に日本語を母語としない、しかも学校教育の段階にある子どもの言語

教育、中心的には日本語教育になろうかと思いますが、言語教育の問題に焦点を当てて考えていきたいと思います。それから今回の話し合いですけれども、テーマが非常に漠然としたものであるということをお話ししましたが、実は私ども日本語教育のチームは国語教育の先生方に比べますと、活動を始めた時期が少し遅かったこともありまして、まだ、ある特定のテーマを問題にしてそのテーマを多面的に見ていくという研究の方向性が定まらない段階です。従って私たちとしましては今日のお話を通じて様々な問題があることを再認識し、その中から今後の研究の方向性といったようなものが見えてくることを期待しております。

それから今日の話し合いでは、大きく二つの目的を考えております。一つは学齢期にある日本語を母語とした子どもの言語教育の問題をより良く把握して、その問題点を共有するということ。これに関しましては、この後インターナショナルスクールの教育に関してスコギンズさんの方から、それから中国帰国者の子弟を受け入れている都立高校の教育に関して今泉さんの方から現状の報告をしていただくことになっています。更に今日はその他にも様々な教育現場から先生方あるいは研究者の方においでいただいていますので、日頃の現場での教育や研究を踏まえたお話などを伺いたいと思います。

国語教育者と日本語教育者との提携・交流を深める

二つ目の目的ですけれども、この教育班の特色でもありますように、国語教育の専門家と日本語教育に携わる者が言語の教育を国語・日本語という二つの対立する構造ではなくて、それを含めた一つの言語教育というような共通の問題意識で捉えるような話し合いになれば更に望ましいのではないかと考えています。学校の教育の現場や日本の社会の中に日本語を母語としない人たちが数多く入ってくるようになった現状の中で、日本の学校の国語教育の方にもそれに応じた変更、再検討というようなものが必要になってきているということを現場の方も認識していらっしゃるのではないかと思います。そういった点に関しまして、日本語教育に携わるものからある種のアドバイス、提言ができるのではないかと思います。逆に長い蓄積を持つ国語教育の方の研究から得られた知見より日本語教育が学ぶべきことも少なくないと思います。日本語教育と国語教育に携わるものがお互いに刺激し合って今後どういうふうな交流が取っていけるか、ということをお話しできたらいいのではないかと考えます。

子どもの第二言語習得における要因

それでは私からの問題提起に移ります。この後お聞きします二つの現場の報告、あるいは問題点といったようなものを把握する一つの手だてとして、子どもの第二言語の習得あるいは教育に関わる要因を私なりに抽出しようと思います。主に日本国内の初等ないし中等の教育機関で子どもが第二言語として日本語を習得する場合を想定して、要因を分類あるいは列挙してみます。全てを網羅している完全なものとは思っておりませんし、この要因一つ一つについてあえて詳しく説明する必要もないと思いますので、ごく簡単に眺めておきたいと思います。（図①）

学習者

まず、通常狭い意味での教育活動あるいは学習活動に関わる要因として意識されますのが、その主体である学習者あるいは教師だろうと思います。学習者の方に目を向けますと、学習者の年齢あるいは認知の発達度、母語（母語の習得）、過去の学習経験といったような要因が子どもの第二言語習得あるいはバイリンガリズムの程度といったようなものに影響を与えることが先行の研究からも指摘されています。またそれが現在の日本語教育の現場を考えたときに、教科の教育と日本語の学習を統合させることの必要性であるとか、あるいは第一言語での学習能力を十分に発達させることが、ひいては日本語で行う教科教育を促進することにも繋がるといったような指摘に通じるのだと思います。

また、もう一つ学習者が持っている要因として、性格や社交性といった情意的な側面が挙げられるだろうと思います。これは教師や他の日本人の子どもたちとの人間関係の形成、更にはそれを通じた第二言語の習得といったようなところに影響を与えるだろうと思います。

学校・教師

一方学校の方、教授側の方に目を向けますと、まず学校での学習者受け入れの体制、あるいは担当する教師の数や経験、それから他の教科の担当教員と日本語の教員とがどういうふうな協力体制を取れているのかということ、また実際の授業で用いる教材や教具といった日々の授業に関わる要因がまず考えられます。更に日本語の学習者の日本語の能力あるいは教科の学習の成果といったものがどういう形で評価されるのか、そしてそれが学習者の将来設計に向けてどのように進路と結びついていくのか、といったようなことも学習者の学習動機あるいは教師の教育の方法といったようなものに影響を与えてくると思います。

親・地域社会に関わる要因

こういった直接教育に関わる要因以外に今回私の方で指摘したいのは、子どもの教育にはやはり共に生活をしている親とか家族、また学校という場面を取りまく地域社会という要因が挙げられるのではないかと思います。学校の教員と保護者との関係、親の生活状況や親が持っている教育観、あるいは何のために日本語を学んでいるのか、何のために日本に滞在しているのか、といったような将来の生活設計を含めた展望、親が持っている日本社会への態度、そういったことが子どもの学習に影響を与えてくるだろうと思います。

また、日本語を母語としない居住者の定着化が進んでいる地域では子どもの日本語の学習や教科の学習をいわゆるボランティア活動として地域の住民が学校と連携を取りながら援助している例が多く報告されています。ただ、ボランティア活動に関してはそれがうまく機能できているかどうかは地域の行政あるいは住民、また学校関係者の理解といった要因にかなりよっているようにも聞いています。それから当事者である外国人の定住者が一種のコミュニティーとして結束してある種の自立的な力を持っているかどうか、といったことも子どもの教育に大きく影響を与えるだろうと思います。

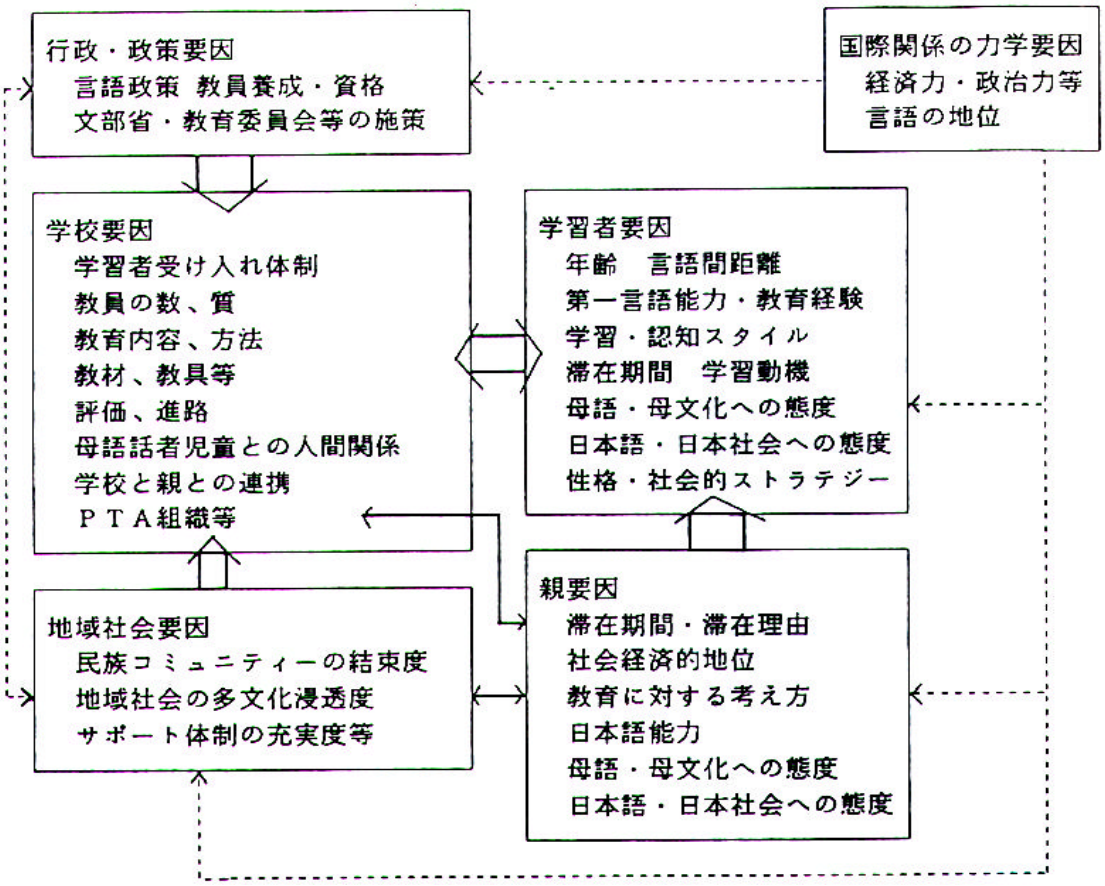
行政・政策要因

　また当然のことなのですが、学校の教育に直接的な影響を与えるものとして、教育委員会の施策、更にそれに方向性を与える文部省を中心とした国の言語政策といった上位の要因が考えられると思います。
　今日の話し合いの中にも出てくると思いますが、個々の学校での子どもの受け入れの体制の問題、あるいは進路の保障とか受験における特別措置の問題、また教員の養成や資格・研修の問題、それから教授ガイドラインや教材の作成といった問題がこれらの要因と関わってくるだろうと思います。

国際関係の力学的要因

　更に私の方でもう一つ指摘したいこととして、このような現代日本社会の中で起きている現象をもう一つ外側で要因として取りまいているものがあるのではないか。それは国際社会における国家間の力、それは経済力であったり政治力であったりすると思うのですけれども、それを背景とした言語の力といったようなものがあるのではないかと想定しました。現在多くの外国人労働者が日本の地域社会に住むようになったこととか、あるいは諸外国で初等・中等段階で日本語が多く学ばれるようになったことも、日本の経済力とは切り離せない問題でしょうし、更に現在日本に住んでいる外国人あるいはその子弟が日本語をどの程度一生懸命勉強しようとするか、あるいは自分の持っている母語・母文化に対してどういう態度をとるか、周囲の日本人がこの外国人に対してどういう態度をとるかといったようなこともこの生活を取りまいている国際社会の影響といったようなことが、有形・無形に反映されているのではないかと思います。

日本語習得の背景要因の意識化が必要

　このように見てきますと、日本語を母語としない子どもの日本語の習得には当然学習者であるとか教師、教室活動といった狭義の言語教育に関わる要因の枠を超えた多くの背景要因が存在していることが指摘できると思います。私たちが今後行っていく、研究は恐らくこの狭い意味での教育活動に直結した部分になるだろうと思うのですけれども、そういった問題を考える際にその外側に地域社会における学校の位置づけであるとか、あるいは地域住民の多文化受け入れの意識であるとか、あるいは日本の社会がこれからどういう方向で外国人あるいはその子どもたちを受け入れようとしているのか、といったような問題を常に意識している必要があるのではないかと考えます。
　以上が私からのごく簡単な問題提起といいますか枠組みです。
　続きましてスコギンズさんの方からサンモール・インターナショナルスクールでの外国人子弟の言語教育についてご発表いただきます。

図①　子どもの第二言語習得に関わる要因